

る大家の息子で仔細あつて家出したもので有ると云ふ噂だけで、誰一人それを確めたものは無つた、性來の酒客で又散樂を善くし殊に小鼓に妙手であつて、日々酒を呑んで鼓を撃つて一人悦に入つて居ると云ふ變物なので、それで可笑事には川に棲る二寸ばかりの小蟹を釣つて其を羹つて食ふので近隣のものは嫌がつて寄り添ふものとはなかつた、併し御當人は結句よい仕合にして飽くこともなく、明けても暮れても、酒に小蟹に、小鼓で、謠曲を唸つてやれなく、殆んど寧日なしである、何んど奇人では無いか、加之に其家屋と云つたら竹の柱に茅の屋根で、杉丸太を地中に生けて八重葺の小やかな破家であつて、そして雪隠が無いのだ、甚だ尾籠であるが裏庭の方は四時も悪臭鼻を劈くのでたまつたものでない、十文字屋先生とんと平氣である、只頑是なき小兒ばかりは面白がつて彼の小蟹を持つて行く、すると喜んで其を下着に杯を擧げる、歡極まつて例の四條五條の橋の——と唱りかける一拍一曲奇に妙に、緩急疾徐音韻呂律に協ひ、行雲停まり月光澄むでも云ふ可き名人であつたといふことである、で今日でもちと異つた人はすぐ十文字屋と云ふ綽號を附けられるのである。

鬼淵の由來

飛驒 白天居子

飛驒國大野郡清見村大字池本地内に鬼淵と稱する地あり、今其由來を語らん、昔此地の傍に「がをろ」と云ふ者住居せし淵あり、彼の淵の近邊に二三戸の農家あり或る時一人の農夫馬を引き行き、川邊に繋ぎ置きたるに暫くありて馬は一散に走り來りしに、彼の農夫は何故ならんと能く見れば、こは如何に綱の先きに身體赤き者腰に綱を巻き付けたるまゝ、引かれ來りしなり、農夫は大きに驚き之を捕ふ、彼の者曰く、我は「がをろ」なり、此馬を捕らんとして、かえつて我身を捕えられたり、と自白して、何卒赦し下され、と頼みたりしに農夫之を赦しぬ、彼又曰く、此禮として我毎朝川魚を捕え此處迄持參して進上申すべしと云ふ、又其置く可き處に我が嫌なる處の刃物を決して置かざる様にと頼み、喜びて歸れり、偕て其翌朝より澤山の魚を取り持ち來り有りたり、夫より怠なく務め居たるに、或日農夫は過りて其處に鎌を置きたりに、夫れを限り止みたりとなん、又其淵の傍なる山の如き岩に大きな

釜二箇あり、其形は竈釜の如くにして高さ九尺餘幅六尺上穴三尺餘あり、其形二箇共相並び居る様實に見事なり又この淵の傍に魚の集合する處あり、夏日に至り魚此に集る故之を捕ふるなり、故に其地の住民は鬼淵又は鬼の釜などと云ふ、今其農家の家名は皆之を名附けて鬼淵と云ふ奇なる事かな。



笠置山

大阪 梅河三濱

○笠置山は山城國相樂郡木津川の上流にあり、關西鐵道笠置驛より僅二丁餘り麓なる笠置村より山道登り八町なり、全山大岩奇石巖々と峙ちて一仙境を爲す、抑笠置山の名の起れるは人皇四代天武天皇の大海人と申していまだ皇子にておはせし頃駿馬に跨りて此山に遊獵し玉ふ、乘馬巖石の間に膝を屈して動かさず、皇子

三寶を禮拜し冥助を乞ひ安寧を得ば當山に伽藍を築きて佛陀を祭らんと宣り玉ふ、忽ちにして馬進む、皇子冠りし蘭笠を後の證として此山に置き玉ふ、よつて笠置と言ふとあり、然るに一説によれば天皇此山に獵し玉ふ時、大鹿跳り來りて天皇を追ふ、天皇危く天に向ひて身の無事を祈り遂に虎口の難を免れ玉ひ、謝恩の爲に此所へ精舎を起さんと思召し、笠を置きて證となし、斯くて其後侍臣命を奉じて此山に來り見るに、一羽の白鷺飛び來りて笠の在所を示せり、これに因みて鹿と驚との字を用ひ、鹿鷺山と稱す云々、此説あまりに拙なし、笠置を鹿鷺と書さしは所謂萬葉風の文字にて字になづみし僻説なるべし、前説の方筋どほりて聞ゆ山號の傳説はこの如し、これはとまれ笠置山の古蹟は後醍醐天皇の行宮となりしより、歴史上、顯著となれるものにて亂世の當時をぞ忍ばる、一天萬乘の大君を苦しめ奉りし奸賊北條高時こそ惡むべきなれ、誰れか元弘の軍書を繕きて血涙を注がざるものやある。

○麓より二丁登れば下の堂と稱す、堂は昔佛像を安置せしとぞ、今は登山者の休憩所となる、周圍の柱は年經し爲め朽ちていとわびしく、此邊りに大手橋あり、木津川を眼下に見る白帆點々船の上り下りを爲すあり

川向ひを伊賀越街道と言ふ、西手に翠松深き森あり、栗栖の杜と言ふ菅公を祭れり、是笠置村の産土神なり、又此所を一の木戸と稱す、元弘元年の戦ひに、足助重範の固めて賊軍を惱せし所、少し登れば上の堂休憩所あり、此邊を二の木戸と稱す、三の木戸の趾に名切地蔵尊あり、此傍の大石を名切石と稱す、元弘の戦に死せし忠士の名を刻せしも安政の震災に倒れ名の彫りし方地向伏して見るを得ず、よつて名とす、笠置寺は近き中興解脱上人の専ら布教せし寺と言ふ、曩の名は福壽院と言ひしを改稱せしものなり、鐘樓に名鐘あり、俗に黄金の鐘と呼ぶ建久年中解脱上人の鑄たるものなり、蓮の形をなす、此寺に保勝會保存會等を設けて當山を維持せり、此所迄麓より八町とす、中央に茶店あり掃除行といき清潔なり行宮遺址の字を押し、菓子を持來れり、登山せし人の家土産に適すべし、茶店の老翁笠置山案内圖及獨案内の小冊子を進む參考の爲め購求す、右手に駒繫の松あり、駒止の松とも言へり、いづれにても意同しく天武天皇此松樹に駒を繫ぎ玉ひしものとぞ、聞えし今あるは古昔の松の枯れしを補ひし小樹を栽ゆ、傍に菅公の廟址と記せし木標あり、栗栖の杜へ移せし宮は元茲にありしと傳ふ、前に

座禪石あり右手には椿本護法善神の社あり、朱の瑞垣ゆかしく延喜八年大和の金峰山より日藏上人の勸請せしものとぞ、寶藏址又傍にあり、少し歩めば藥師文珠彌勒の三大石屏列す、藥師石の高さ四十尺、幅三十一尺、石の形ち恰も軍艦の如く壯絶目を驚かせり、帝國軍艦の笠置もかくやと思ひ量りて、我國の御稜威をぞ知る、文珠石は高さ二十二尺、幅十六尺、彌勒石は高さ五十二尺、幅四十二尺、此三体を笠置寺の本尊なりと稱す、三石とも佛像を刻せしも元弘の兵燹に罹りて字の跡を止めずと言ふ、笠置は深山にもあらぬにかゝる大石の多くありとは想像の及ばざる所、唯天を仰ぎて晒然たり、前に堂あり、今假りに設けしものとぞ堂名を正月堂と呼ぶ、南都の二月堂三月堂に對して言ふとぞ、兵燹に罹る迄は總て壯觀なる伽藍にてありしにや、足に踏み行く石軌れも柱穴を穿ちありて其區域廣し、解脱上人の母の墳なりと言ふ十三塔を見つゝ千手窟に到る、白鳳三年役の小角の苦行せし所とていと凄し、金剛界石胎藏界石の二石は金胎兩部界と稱していづれも高さ四十尺より四十八尺幅二十七尺より三十六尺ありといふ、聖武天皇の御代良辨上人此所に於て七日七夜修行せしとぞ虚空藏石は弘法大師の作

にて佛像を刻り、全國到る所弘法の足跡無きは稀れなり、探險家といふべし、胎内竇とて石の空門の如きをくいる、これも役の小角の修行せし所と言ふ、安政年間の震災のため轉覆して形を存するのみこゝを過ぎて少し登れば四方を見渡して風光頗る絶景、木津川の北岸に石を切り出す匠夫、其所此所に蟻の如く、關西の線路帯の如く長し、そが間に二三の村落録山に似たり、太鼓石は中央に凹みあり、之を踏めば太鼓をうつ音あり、元弘の戦に陶山義高小見山氏眞の登りし問道は此邊なりとぞ、嗚呼陶山小見山は問道より登りて不意に行在所を焼討にせし曲者なり、太鼓石を竇れば動石あり一名手鞠石とも號く、重量の石なるに片手で押すも容易に動くは妙といへば妙、此石の形下方の所に尖りあればさもありなん、此石を本性坊の精



を教へしは飛鳥村とて、今に乞兒許り住居すと云ふ、(俗説に曰く此村問道を教へし人住めば天罰にて世々乞兒絶えず近村の交際なし云々)此石の下は十三股の妖鹿の顯れしと言傳ふ鹿ヶ淵とぞ聞えし、程近く平等石あり、平方面數十尺疊を敷きしが如く岩根に生ふる松が枝をたよりに登る、四方の眺望前に比し一層の佳景東北に伊賀上野の山々を望み、西北は列峰の間に翠りなす比叡山を幽に望む、石の崖下に不動尊の石像あり、俗に東の視と唱ふ見下せば足元痒し曩に見上げし軍艦石の上なり、平等石の下は蟻の戸渡りとして屏列せし兩石の細き間をば体を横にして通る實に心細し、向ふの山に千手が瀧あり、笠置八景は此邊順覽凡十町の間あり、是より頂上二の丸の趾に到る、海面より

千三十三尺ありと、或人は測量せりとぞ、菅公冠掛の松千餘年のものとも見えす、延喜三年の秋八月菅公登山して勝景を愛でられし際冠をかけし松なりとい

神といふはをかし、(本性坊は元弘の戦ひの時大石を動かして北條の賊兵を挫きし大方の僧なり)賊兵に問道

ふ、行宮の址は最高所にありしものか、此邊總ての石に柱穴あり、傍への笠置石は天武帝の笠を置き玉ひしものどぞ、石は大きからず少し離れて貝吹石あり元弘の亂に官軍の兵之に登りて陣貝を吹きしとの説あるもいかゞ石の形ちをつくく見るに、恰も蛤貝の土中より吹き出でし如く見ゆ、故に貝吹石なるべし、さるを後の人の歴史にあて嵌めんとての誤傳ならんか、山少し低みに天狗の枯松とてあり、又阿彌陀如来彫刻の石あり、天文三年七月十五日の文字を見とひ、石段登れば行在所なり、中央に後醍醐天皇行在所之蹟と記せし御木標を建つ見るから元弘の昔を忍びて落涙數滴といめあへず、天皇の御歌に、

さして行く笠置の山を出しより
天が下にはかくれ家もなし
藤原藤房御歌に和して歌ひけらく

いかにせんたのむ蔭とて立よれば
なほ袖ぬらす松の下つゆ
此歌南北太平記には「尚袖ぬる、松の下風」とありおそらくは誤りなるべし、予はゆくりなくも登山せしなるが、かしてみて行在所の御前に額づきて
天の下知らし、君のいかなれば

養老公園

美濃 伊奈 香雲

養老公園は美濃國養老郡養老村多度山中に在り、大垣停車場を去ること三里、人力車賃四拾錢程にて達するを得べし、抑此地は孝子源丞内の住みし地にして、元正聖武の兩帝行幸ましまし年號まで養老と改め、天下に大赦せられたる舊蹟にして續日本紀大日本史等に出で世人の能く知る所なり、明治十三年此地を開きて公園となし、神社佛閣を増築し、層樓雅亭を増設し道路を修繕し橋梁を架し、櫻楓樹幾萬株を植へ添へ天然の美に人為の巧を加へし以來一層其名天下に轟き、春は白雲のたなびくが如く百花咲き亂れ、夏は瀑布に三伏の炎熱を洗ひ、晩秋の紅葉、嚴冬の觀雪總て佳ならざるなく東は有名なる濃尾の大平野にして木曾榊妻長良の三川其間を流れ



り、宿泊料僅に二十五錢、支度十二錢位なれども客室清潔にして其他好に應じて料理をなす、名産には養老酒源氏豆玉帚孝子飴釜敷等あり。

遠く十三州を望む、園内に在る瀑布は彼の孝子の徳に依り酒と變せしと云ひ傳ふる、養老の瀧にして高さ十丈五尺巾二間あり、大なる巖石によりて直下し、水勢矢の如く白布を晒すが如し、九條公曾來遊ありし節わが父に賜はりし歌左の如し、

老を養ふ瀧のしらたま
神社には郷社養老神社及行宮神社あり、養老神社境内より涌き出づる水を菊水と云ふ、水質清美寒冽にして四時同温度なるを以て冬は湯の如く昔行在所の跡にして兩帝の神靈を奉祀す、旅宿には豆馬亭掬水樓あり共に宿泊料一圓七十五錢、五十錢、支度五十錢、三十五錢、二十五錢を普通とし最輕便なるは瓢遊亭竹光堂あり、

かくれ家なしとうたはれにけん
天皇瑞夢に楠正成を御味方に得玉ひしとき、
笠置山朽ちせぬ石はぬば玉の
夢に得たまふ楠の木かそも
陶山小見山の兩賊をのしりて
忠實をゝるあだとなりけりうらうへに
つくせし人のわざどうたてき
これの宇豆の清境は明治三十三年の秋有志の人々の功により造營せりといふ、阿那尊さかも
◎是より下向に就く毘沙門天の堂あり、楠正成の守本尊を祭る邊りに梅林あり、如月の末つ頃とて紅白の花交々咲き匂ひて、心すがし、又牡丹數株植ゑあるを見る、すぐ稻荷堂にて多喜尼天稻荷を祭る、稻荷山といふ躑躅の早咲き岩間に見えて錦を粧ふ、見つ、下りて山麓の笠置温泉場の邊より山手を望めば一大自然石に行宮遺址の四文字を彫刻せるを發見すべし、二品親王彰仁殿下の御書なり是萬世天壤と共に朽ちざる紀念碑とこそ仰ぎ見るらめ。